



Title	In vivo F-19 chemical shift imaging with FPTA and antibody-coupled EMIQ
Author(s)	三嶋, 秀行
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38314
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	三嶋秀行
博士の専攻分野の名称	博士(医学)
学位記番号	第 10344号
学位授与年月日	平成4年6月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	In vivo F-19 chemical shift imaging with FTPA and antibody-coupled FMIQ (FTPAと抗体架橋FMIQを用いたin vivo ¹⁹ Fの化学シフト画像)
論文審査委員	(主査) 教授 森 武貞 (副査) 教授 小塙 隆弘 教授 井上 俊彦

論文内容の要旨

【目的】

当研究室では腫瘍関連抗原に対する抗体を架橋したフッ素含有エマルジョンを用いてフッ素MRイメージングによる腫瘍の画像化に取り組んでいる。フッ素の腫瘍集積量を増加させるため抗体を架橋させるとともに、エマルジョン化したフッ素化合物を投与しているが、肝臓、脾臓などの網内系へのエマルジョンの非特異的取り込みにより十分な腫瘍像の描出が困難である。本研究では、網内系集積の問題を解決するためMRIの化学シフト画像の手法を応用して、体外から同時に投与した2種類の異なるフッ素化合物を別々に検出し、それらの体内分布を画像化することを試みた。

【方法】

2種類のフッ素化合物としてFMIQ (perfluoromethyldecahydroisoquinoline) とFTPA (perfluorotripropylaminol) を選択した。どちらも、安定なエマルジョンを形成し、生体内半減期も短く、安全に投与できる化合物である。両者は主要なピークが離れたスペクトラムを有するので、化学シフト画像で別々に検出することが可能である。4%卵黄レシチン、25%フッ素化合物、蒸留水から直径120-130nmのエマルジョンを作り、FMIQエマルジョンには、2つの架橋剤SPDP (N-succimidyl-3-(2-pyridyldithio) propionate) と SMPB (N-succinimidyl-4-(maleimidophenyl) butyrate) を用いて抗CEA抗体(BD6)を架橋させ、FTPAエマルジョンには抗体を架橋させないで、CEA産生ヒト大腸癌細胞株(LS174T)移植ヌードマウスに投与した。投与量はFMIQエマルジョンは6g/kg、FTPAエマルジョンは1g/kgで、混合して同時に投与した。72時間後に7テスラのMR I装置(Spectroscopy Imaging System, 300/183)で撮影し、FMIQとFTPAの信号を画像化した。撮影はCHESS (chemical shift-selective) 法を用いて、TR (repetition time) 800 msec, TE (echo time) 10 msecで行ない、128回の積算をし撮影には55分を要した。画像化にはFMIQ、FTPAそれぞれ最も左のピークを用いた。

【結果】

FMIQの信号とFTPAの信号をフッ素の化学シフト画像で別々に画像化することができた。肝臓、脾臓ではほぼ

同様の画像が得られたが、腫瘍では異なる画像が得られた。腫瘍では、架橋無し FTPA エマルジョンが腫瘍の中央にのみ分布したのに対して、抗体架橋 FMIQ エマルジョンは腫瘍全体に分布した。FMIQ 濃度、FTPA 濃度は肝臓においてそれぞれ、24mg/g tissue, 16.5mg/g tissue、腫瘍において、0.1mg/g tissue, 20mg/g tissue であった。

【総括】

抗体架橋 FMIQ エマルジョンと抗体架橋をしていない FTPA エマルジョンの2種類の異なるフッ素化合物を同時に投与して、それぞれの体内分布をフッ素化学シフト画像で検討した。両者の腫瘍における分布は異なっており、この方法が腫瘍の画像診断に応用可能であることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、生体内半減期が短く安全に投与できる2種類のフッ素化合物、すなわち FMIQ (perfluoromethyldecahydroisoquinoline) と FTPA (pefluorotripropylamine) を選択し、MRI の化学シフト画像の手法を応用して、腫瘍の生体内局在描写を試みたものである。抗 CEA モノクローナル抗体 (BD6) を結合させた FMIQ を FTPA とともに CEA 産生性ヒト大腸癌細胞株 (LSI74T) 移植ヌードマウスに投与し、FMIQ の信号と FTPA の信号をフッ素の化学シフト画像で別々に画像化することに成功した。両者の分布は肝臓、脾臓ではほぼ同様であったが、腫瘍では抗体結合をしていない FTPA エマルジョンがその一部（壊死部と推定される）にのみ分布するのに対して、抗体結合 FMIQ エマルジョンは腫瘍全体に分布した。

この結果、この方法が腫瘍の画像診断に応用可能であることが示され、今後の画像診断の研究に資するところが大きく、学位に値する業績と考える。